TOPICS

Asian Clinical Oncology Society (ACOS)：発足からの経緯とAsian Oncology Society (AOS)への移行と展開について

岐阜大学名誉教授、元ACOS会長、中部国際医療センター顧問　佐治 重豊

はじめに

アジア臨床腫瘍学会（Asian Clinical Oncology Society; ACOS）は、日本の田口鐵男先生、中国のYan Su先生、韓国のJin Pock Kim先生の発案で、これに台湾のJacqueline Whang-Peng先生、フィリピンのAntonio H. Villalon先生等が加わり、アジアの癌治療関連医師間の親睦目的で1991年9月16日に発足し、初回学術集会が同年10月16日に大阪で開催されました。以降の開催年、開催都市、学術総会長は1993年がBangkokでS. Puribhat教授、1996年がKunmingでYan Sun教授、1999年がBaliでDC Poetiay教授、2001年がTaipeiでJacqueline Whang-Peng教授、2003年がSeoulでJin-Pok Kim教授、2006年がBeijingでYan Sun教授、2008年がManilaでAntonio H Villalon教授と隔年開催されてきました（表1）。個人的には2008年のフィリピンでの評議会で、次期開催予定国であったマレーシアに代わり、何故か私が第9回総会長に任命されてしまいました。当時、私は既に退官（2005年）後で、財力・人力とも手持ちが無く、即辞退と考えていましたが、帰国後、後任の吉田和弘教授と相談の結果、学術総会長を承諾し、2010年に岐阜市で開催しました。幸い吉田和弘教授はじめ、教室員、同門会員、中村裕信副会長先生、ACOS日本評議員等の諸先生方の協力のもと、驚く程盛大に開催できました。会期は2010年8月26～28日の3日間で、会場は岐阜グランドホテル、参加人数は日本（475名）、韓国（85名）、台湾（34名）、中国（27名）、インド、インドネシア、米国（各12名）、ベトナム（11名）、シンガポール、ネパール（各8名）、香港、フィリピン（各5名）、他に英国、パキスタン、フランス、イタリア、オーストラリア、マレーシアから数名と大変多くのアジア人に参加いただき、演題総数も925題で、これを記念してアジアの若手医師を対象にトラベルアワードを新設しました。

岐阜での開会式会場（立ち見が出る盛況ぶり）

また、幸か不幸か、岐阜での評議員総会で、私が第4代の会長（初代：Tetsuo Taguchi、Japan、2代目：Jin Pock Kim、Korea、3代

表１　アジア臨床腫瘍学会学術総会開催国一覧

開催回数（年度）		開催地	（開催国）	総会長氏名	参加国数	演題数
1	1991	Oosaka	(Japan)	Tetsuo Taguchi		
2	1993	Bangkok	(Thailand)	S. Puribhat		
3	1996	Kunming	(China)	Yan Sun		
4	1999	Bali	(Indonesia)	DC Poetiray		
5	2001	Taipei	(Taiwan)	Jacqueline Whan-Peng		
6	2003	Seoul	(Korea)	Jin-Pok Kim	18	520
7	2006	Beijing	(China)	Yan Sun		
8	2008	Manila	(Philippines)	Antonio H Villalon		1378
9	2010	Gifu	(Japan)	Shigetoyo SAJI	18	925
10	2012	Seoul	(Korea)	Kyung Sam Cho	30	1451
11	2014	Taipei	(Taiwan)	Tsang-Wu Liu		
12	2016	New Delhi	(India)	Sanjeev Misra		
13	2018	Chiang Mai	(Thailand)	Sumitra Thongprasent	25	691
14	2020	Manila	(Philippines): By Web	Gloria Cristal-Luna		
15	2022	Seoul	(Korea): By Web	Yeul Hong Kim		

Society president : 1st Tetsuo Taguchi (1991-2001), 2nd Jin-Pock Kim (2001-2003), 3rd Yan Sun (2003-2010), 4th Sigetoyo Saji (2010-2016), 5th Yeul Hong Kim (2016-2019)
Secretary general : Kazuo Yoshida, Han-Kwang Yang
Members countries (19) : Bangladesh, China, Hong Kong, India, Indonesia, Iran, Israel, Japan, Kazakhstan, Korea, Malaysia, Nepal, Pakistan, Philippines, Singapore, Sri Lanka, Taiwan, Thailand and Viet Nam: 全アジア51カ国中19カ国（17.6％）しか加入していない！
Council members (2018) : total 86.

目：Yan Sun、China）に選任され、以降2016年までの６年間、本学会の会長職を務めることになりました。

会長就任中の活動内容について

アジアには既に、アジア太平洋諸国を含めたAsian and Pacific Federation of Organizations for Cancer Research and Control（APFOCC）が1973年９月22日にUICC、WHO、IARCとアジア各国の代表が日本の伊勢志摩（賢島）に集まり、太田邦夫先生を中心に創設されており、第１回学術集会も東京で開催されました。しかし、本当の意味でのアジア人によるアジアのための学術集会は、ACOSが最初と考えています。

会長就任後、ACOS学会の組織構成や会則等を検索しましたが、2010年当時、メモ書き程度の文章しかなく、ホームページも開設されておらず途方にくれました。そこでまずACOSのホームページを開設（http://www.asia-acos.org/）し、組織委員会と会則をメモの中から取捨選択し、田口鐵男前会長の記憶をたどりながら補足・充足してホームページ上に公開しました。さらに、設立意義を強調する目的で本会のMission、Vision、Core Valueを立案し、これもホームページ上にアップしました。Missionは「To ensure the current best practice for Asian cancer patients by implementing multidisciplinary treatments」とし、この目的を達成するためのVisionとして「ACOS strongly hope that our Asian patients will be able to be free from cancer by multidisciplinary treatments」を掲げ、実行へのCore Valueとして「to make a difference in Asian oncology through translational research and expert techniques、to rethink cancer therapy from palliative to curative、to highly motivate both of doctors and patients、to identify the best

表２　The tope five cancer death in Asia (exact incidence is unclear)

	1	2	3	4	5
China	lung	stomach	liver	colorectal	breast
India	cervical	breast	lung	oral cavity	stomach
Japan	stomach	colorectal	lung	breast	liver
Korea	stomach	colorectal	lung	liver	breast
Nepal	lung	cervical	breast	stomach	hematogen
Philippines	lung	breast	colorectal	liver	cervical
Singapore	colorectal	breast	lung	cervical	stomach

Organ specific incidence : lung ＞ colorectal ＞ stomach ＞ breast
Current topics : Incidence of breast cancer and prostate cancer is rapidly increasing in south Asia.

practices and do it at good timing、to develop less invasive and less expensive therapies、to bolster cancer prevention through education and early diagnosis」を提唱しました。

しかし、将来展望を含めたアジアの実情を詳細に分析・検討すると、①人口増加と貧困、②公害等による環境汚染、③高度な医療機器等は未整備状態で国立がんセンター的機構や医療保険制度も未成熟の国が多い等々の難題が山積し、近未来的には「癌患者数と死亡者数の増加」で労働人口が急激に減少（がん罹患年齢が日本より若年層に多い）し、これによる経済破綻が強く危惧されています。また、UICC の予測でも①人口動態から2025年頃には世界の半数以上がアジアに偏在し、そのトップが中国からインドに代わること（中国は一人っ子政策の影響で人口減少が進み、同時に高齢化が加速している）。②アジアはほぼ全域が貧困社会のため２人に１人が癌に罹患し、その半数以上が癌死する（日本では３人に１人が罹患し、その1/3が癌死）と警告されています。それ故、計算上2050年頃には年間1,700万人のアジア人が癌に罹患し、十分な治療を受けることなく癌死するため、膨大な労働人口の喪失、膨大な医療費と癌性疼痛患者に対する対策が急務で、さらなる貧困の増加による社会情勢の混乱等の悪循環が予測されています。

さらに、これらの将来予測と対策は通常「がん統計」からの算出が基本ですが、残念ながらアジアには日本、韓国、台湾、シンガポールを除くと、いわゆる「がん統計」は未整備で存在せず、まさに超医療過疎地帯です。そこで、まず第１歩として「アジアにおけるがん統計」の現状を調査しました。岐阜での第９回総会開催時に、全評議員にお願いして自国の「がん統計」を報告いただき、アジア全体の傾向を予測しました。残念ながら回答可能な国は数カ国のみで、他に主要都市での不十分な統計を合わせて集計し、その概要を学会記念誌『Recent Advances of Cancer in Asian Countries』として発刊しました。すなわち、アジアでの臓器別死因はトップが肺癌で、以下結腸癌、胃癌、乳癌と続き、特筆すべきはネパールでの頭頸部がん、また近未来警告事項として「南アジアでの乳癌と前立腺癌の急増」等々が判明しました（表２）。

これらの現状を含め、アジアの医療危機を防止・改善するためには、ACOS 学会がアジアの代表者として活躍しリードする責任が大きく、その代表選手としてアジアで最初に高齢化社会を経験した日本が尽力すべき課題と考え、会長任期中の全期間を最大限活用し「可能な限りの努力」を投入してきました。その詳細は、ACOS ホームページ、What's News の中で、Former President Saji's Address（04/26/2016）を参照ください。

尽力すべき課題は、学際面では①癌患者をいかに早く発見し、②安くて安全に治療する方策

ACOS 2014　評議員会（台北、台湾）

学会記念誌

の立案、外科療法は③無輸血下での低侵襲手術、薬物療法は④有害事象が少ない低コスト薬剤（漢方薬等）の開発、⑤働きながら治療できる医療環境の整備、等々であります。具体的には、高度（？）な医療技術に加え、アジア特有の漢方など低価格薬剤を加味した「オリエンタル医学の開発・発展」が急務と考えました。また、アジアでの臨床試験等の開発組織として、西山正彦先生を中心にアジア臨床腫瘍連盟（Federation of Asian Clinical Oncology／FACO）の創設と、アジアで注目の臨床試験を展開していただきました。

財政面での展開と対策

1. Kobayashi Foundation Award（KFA）の創設

アジアの若手研究者や医療従事者等に対する研究助成として、2010年の岐阜での総会時に大鵬薬品の「小林がん学術振興会」にお願いし“Kobayashi Foundation Award（KFA）”を設立いただきました。このアワードはACOS学会開催時に受賞者を発表・表彰する方策で、毎回約200万円の助成を行い、2020年度で第7回を数えることができました。その詳細と受賞者一覧はACOS学会ホームページを参照ください。

KFA授賞式で（2014年台北）

2. 学会運営費と年会費問題

ACOS学会には基金は無く、会員組織も未整備状態でありましたが、その最大の要因が年会費徴収の是非です。すなわち、各国間で経済格差が過大で、一律徴収は馴染まず（日本を100とした場合、シンガポールが74、韓国が56、台湾が35、インドが25、フィリピンが19；2016年度経済白書から）、かつ国際間の送金システムが極めて複雑なため、技術的にも徴取困難状態に近いと推察されました。さらに各国評議員宛てのアンケート調査でも一律に年会費を徴収することには異論が多く、対処不能状態に近くACOS存続の最重要課題となっています。幸い今回AOS学会への統合移行で、この財政問題も解決されるものと密かに期待した次第です。

3. アメリカのASCO、ヨーロッパのESMOを目指した「アジアのAOS」への期待

Asian Oncology Society（AOS）は、APFOCCとACOSの両学会理事が2016年に韓国のSeoulで一堂に会して論議され、初代会長が韓国の

某国、某ホテル玄関前で参加者たちと

閉会式では、毎回総会長と次期総会長を囲んで全役員が壇上に整列

Yeul Hong Kim 教授のもとで統合が賛同されAOS 学会が誕生しました。引き続き2018年福岡市での第57回日本癌治療学会総会時に、吉田和弘会長のもとで発足式典が盛大に開催されてスタートし、アジア各国からの期待が高まりました。発足の経緯と詳細は AOS ホームページを参照ください。

最後に

ACOS 総会長と学会長時代を含め、約十数年間の ACOS 活動を振り返り、苦労以外にいずれの学術総会開催国でも若手会員や役員の先生方に囲まれ、記念撮影や握手攻め、あるいは激論に発展した等々の経験から、アジア人による、アジアのための「人の輪」を体験することができ、誠に幸せでありました。これも ACOS 学会が存在したおかげで、各国評議員、各学術総会長、各国組織委員の皆さま、さらにすべてを支えてくださった岐阜大学腫瘍外科、吉田和弘教授、同教室員、秘書さんたち、それにホームページ維持等で経済面の支援をいただいた多くの製薬企業の皆さまに心からお礼を申し上げます。そうして AOS 学会の今後の益々の発展を祈念し、筆をおきます。頑張れ AOS !!

（令和 5 年 4 月吉日記）